

2023年7月5日(水) 14:00-16:30 @シネマ・チュプキ・タバタ シアター 参加者：8名

テーマ なぜ、いま映画館をつくるのか

ゲスト 今井 健太さん (ミニシアター設立準備中)

参加者へのメッセージ

“ 今回は、サロンメンバーであり、現在、大宮に映画館を設立予定の今井健太さんをゲストにお迎えして、なぜ、いま映画館をつくるのかについてお聞きします。

もともと映画館を作りたかったわけではなく、「いろいろと考えた結果、映画館が最善だった」と語る今井さん。全国のミニシアターが次々と閉館する中、なぜあえて今、映画館なのでしょう。打ち合わせで今井さんが答えてくださったことは、わたしたちが想像していたよりずっと深くそして今の時代を生きる上で、とても大切な事柄に溢れていました。

今回は、今井さんが映画館をつくる過程で見えて来たお話を中心に、みなさんとさまざまな「なぜ」を語り合いたいと思います。それはわたしたちが「どんな未来を見たいのか」という話につながりそうです。”

第3回のサロンでは、チュプキサロンにキックオフ回(2022年2月、3月開催)から継続参加している今井健太さんをプレゼンターに招き、今井さんが現在大宮で設立準備を進めている、ユニバーサル上映を視野に入れたミニシアターの構想を聞きました。その後、発表内容をふりかえりながら全体で対話を行いました。

毎回参加しているレギュラーメンバーのほか、これから映画館を作りたいと活動している方、映画館を運営している方、映画館を応援している方も招待しました。

今回から本題に入る前にアイスブレイク(緊張をほぐし、その場にふさわしい雰囲気を作るためのちょっとしたアクティビティ)を取り入れました。名前と普段の活動に加え、お題に対して回答してもらいます。今回のお題は「本日のコーディネイト」でした。

今井さんのプレゼンに対して、参加者からは、持続可能な経営のためにユニークな複合施設を発想した背景、まちの文脈や文化を守り、次世代に手渡すという思い、経営の仕組みづくりや資金調達、異業種から参入しているからこそ見えた映画産業の課題など、幅広いトピックについて質問やコメントが寄せられました。映画館の設備や運営に関するアイデアも持ち込まれ、新しい映画館の誕生を皆で盛り立てていくことの喜びを交わす回となりました。

このレポートではその様子を抜粋、編集してお伝えします。ミニシアターの構想に関しては、設立準備中ということもあり、ご本人の許諾をいただいた範囲で掲載しています。

(構成・文：舟之川)

プロジェクト運営メンバー 平塚千穂子 (シネマ・チュプキ・タバタ代表) / 石井健介 (ブラインド・コミュニケーター)
舟之川聖子 (コーディネーター) / 吉川真以 (コーディネーター)

石井：前半は今井さんにミニシアター設立のお話をうかがいます。後半はみなさんとの対話です。このサロンで生まれたことが、それぞれの現場で生かされたり、つながりから構想が具体化したり、そんなふうな作用したらいいなと思っています。では今井さん、発表をよろしくお願いします。

今井：よろしくお願いします。毎回みなさんの迫力に圧倒されています。話を聞くときに、その人が何を伝えようとしているのかをみなさんが真剣に受け止めようとしているのを感じるのです。それでちょっと緊張しています（笑）。

ことの始まりは、区画整理事業

僕がやろうとしているのは、シェアハウスとカフェと映画館の複合施設です。ことの始まりは埼玉県の区画整理事業でした。計画地はJR大宮駅西口から徒歩5、6分のところ。そこに僕の妻の父親が持っている土地があります。

駅から近いので、当然大手のハウスメーカーやデベロッパーがどんどん参入してきて、計画が始まった1995年から約30年の間に建物がどんどん建ってきています。昔ながらの多様性のある街並みは影を潜めてしまって、似たような建物が並んでいる。なぜかという、高齢の地権者の方は、自分で今から新しく何かを建てるよりは、土地を売却して、自分は他に引っ越す。そこをデベロッパーが一つの大きな土地にまとめてマンションやビルを建てているんです。あるいは、単身者向けの賃貸マンションが作りやすく収益性もいだろうということで。地域の歴史的な文脈は絶たれて、人のつながりがどんどん希薄になっていると感じていました。

とはいえ、僕にとっては義父の土地なので、この件についてはずっと距離を置いてきました。それが2019年の初めに、「主導権を持って何かできませんか」と相談されました。義父は、自分はもういなくなるのだ

から、次の世代の人たちが考えたほうがいいと思ったみたいです。そこから本格的に考え始めました。



今井さん（左）と進行役の石井（右）

映画館があったらどうだろう

最初は賃貸住宅を建てて、その1階部分をテナントにして子ども食堂や親子カフェを入れて、地域交流の場にしたらどうかと考えました。タワーマンションが建って、人が急に増えていたので需要があるかなと。他にもいろんなことを考えたんですが、どうしてもどこか取ってつけたような話になってしまう。ハコモノ行政の個人版みたいな、「こういうものを作れば、こういうふうに来るだろう」という乱暴な考え方じゃないかと疑問がわきました。

そこで、ここがどんな土地なのか、経緯を知ろうと思って、図書館に行って市史を読みました。そうしたら、大宮駅周辺の街並みは国鉄時代の労働者が作ったものだということがわかった。当時、工友会という互助組織があって、労働者とその家族のためにということで、みんなで寄付をして、工友館という建物を建てたらしい。そこでは芝居や映画や教育講話が行われたり、お風呂やビリヤード場があったりしたと。へえーと思いました。実は大宮には映画館がないんです。隣のさいたま新都心駅にはシネコンがあるんですが、大宮にはない。かつては7、8館あったんですが、今はゼロの状態がずっと続いています。

そういうことを知った後に、計画地の辺りをぶらぶら歩いていてふと、「映画館がここにあったらどうなんだろう」と思ったんです。僕は子どもの頃から映画が好きで、映画を観ることは自分の学びでもあり、救いでもあると思ってきました。そして、時間の経過や時

代の変化の中でも、初めて観る映画はいつでもその人にとっては”新作”である。そういう時間を越えられるような、巻き戻していけるような力が映画にはある。その機能が街の中にあつたらいいんじゃないか。建物にしても、街並みにしても、古くなるとダメという方向ではなく、時間が経っても価値を失わないものを作りたいと思いました。

設計は、初期の頃から建築家の佐々木善樹さんをお願いしていました。彼は建築家としてはちょっと変わった方で、「公共性を持ったものは建築家が単独で考えるべきではない。本当にそれが必要なのか、どんな形がよいかということをついぶんいろんな人が集まって話し合う。そこから生まれてきたものは必然性を持ったものになる。人はそういう必然性のある建物の中に行くと、気持ちが落ち着くものです」と話してくれました。それでなるほどと思って、友人や知人に声をかけて、話し合いを始めました。今日オンラインで参加されている映画上映者の杉本悠さんもその一人です。

わからないことは聞いてみる

僕は本業は設備工事の仕事をしていて、普段は埃と油にまみれている人間です。映画館は全然畑違いで、作り方は全くわかんないわけです。わかんないことは聞いたほうがいい、ということで、いろんな人に会いに行きました。たとえば、埼玉映画ネットワークというNPOがあって、それを設立した竹石研二さんという方が深谷シネマというミニシアターの館主であると知りました。竹石さんのプロフィールを見て驚きました。「水道設備工事の仕事をしていて、50歳のときに映画館を作りたいと思い立つ。深谷の商店街で上映会から始めて、のちに映画館を作る。区画整理事業で建物が解体されることになり、現在の地に映画館に移転する」と書いてあって。僕はそのとき50歳。本業が設備工事業で、区画整理事業をきっかけに映画館の設立を考えている……キーワードがポンポンとつながったので、これは会いに行かなきゃと思いました。そして深谷シネマに行って、「僕、大宮で映画館を作ろうと思って……」と話し始めたら、竹石さんはすごく驚いて、「いつかそういう人が現れるんじゃないかと思ってた」と、目に涙を浮かべていました。こんなふういろんな人と出会いながら、その後も進んでいきました。

他にもコミュニティシネマ会議という、全国のミニシアターが年に一度集まる場に参加して、韓国の映画の助成の仕組みについて聞いたりしました。そして、「デジタルシネマの仕組みとレギュレーション」「日本国内の上映機器の流通システム」「映画館の運営コスト」「配給会社と映画館の関係」「映画館同士の競合や協力関係」「行政による支援の枠組み」などについても、疑問が湧く度に調べていきました。

消費社会の映画館

映画って、文化芸術と娯楽という両方の文脈の上にあると思うんですが、コンテンツという消費物になりつつある。映画の消費期限がどんどん短くなっていると感じます。映画館で公開された期間は人の目に触れるんだけど、そのあと誰も観ることがなくなってしまう。もちろんネット配信やディスク化されるものもあるけれど、大量のコンテンツの底のほうに沈んでしまう。でも映画って消費されて無くなるものではなく、人間の中に残るし、その人間から次の動きが生まれていくものなんじゃないかと思いました。

そして、小規模の映画館の役割を考えました。規模の大きいシネコンは、興行収入の面では多くの割合を占めるわけですが、実は日本全体の上映本数の60%はミニシアターで上映されています。さらに、国内で公開される作品の40%はミニシアターでしか上映されていない。つまり、ミニシアターがなくなっていくと、この40%がどんどんなくなってしまうということなんです。小規模の映画館が多様な作品を届ける役割を持っているということがわかった。その価値を守るためには、新しい仕組みを作る必要があります。

事業計画への落とし込み

ではどう作るか。社会で文化芸術を支えている仕組みには、大きく、「人の暮らし」と「経済活動」の二つがあるとして、それらを一つの建物の中に入れてしまえばいいんじゃないかと考えました。つまり、人の暮らし（シェアハウス）と経済活動（カフェ）の二つで文化芸術（映画館）を支えるということです。それらのレイアウトについては、1階にカフェがあって、2

階に映画館とシェアハウスの人たちの共用リビングがあり、3階より上がシェアハウスになっています。

具体的に落とし込んでいく中では、建築家の佐々木さんが、銀行からの借入金の返済をシェアハウスの賃貸収入だけでバランスするように計画を立ててくれました。それは事業を安定させるためもありましたが、銀行からの融資を受けるための対策という点でも重要でした。要は、銀行にとっては、映画館が利益を生むものとしてではなく、マイナス要素になると予想されたからでした。実際、銀行に説明するときにはなかなか理解してもらえなくて大変でした。

いろんな人が来られる場所

最後に、映画館とは別に、この地域に関係することで行政と交渉する案件が持ち上がりました。その活動の中で、近くの保育園の理事長と話す機会があって、「子どもたちの映画会を一緒にやりませんか」という提案をしたら、すごく喜んでくださって、今実現を目指して話をしているところです。他にも語りきれないくらいのことが起きているんですが、とにかくこんなふうにあることをきっかけにアクションを起こすと、いろんな縁が生まれて、次の展開が起こるということを実感しています。

運営に関しては、過度な意味づけはあまりせずに、いろんな人が安心して来られる清潔な場所でありたい。ユニバーサル上映もぜひやりたいです。これから1年以内には着工して、着工後1年ぐらいでオープンできたらと思っています。ありがとうございました。

映画館のアイデアを持ち寄る

石井：今井さん、ありがとうございました。では、ここからはみなさんから感想や質問をお願いします。

イベントをしやすい好立地

参加者 a：映画館単体で成り立たせるのは無理なので、シェアハウスから毎月賃料が入ってくるのは大事

ですね。監督やキャストに来てもらってイベントをやって、賑わいを作りだすにも、大宮なら来てもらいやすい。都心の映画館と変わらない感覚で実施できる。

クラウドファンディング

参加者 b：みなさんに認知してもらおうツールとして、クラウドファンディングも検討してはどうでしょうか。わたしはクラウドファンディングのプラットフォームを運営しているんですが、立ち上げのときに考えていたのは、一人ひとりがお金の使い道をクリエイティブなものにも振り分ける表現活動でもある、ということなんです。“お金ないから恵んで”アピールという誤解も一部にはあるかもしれませんが、気にせずぜひやっていただきたいです。

平塚：チュプキもクラウドファンディングを2回やりましたが、やる意義の多くはお金を集めるよりも知っていただくということですね。「こういう場所をみんなで支えていこうじゃないか」と言ってくださる方が増えていくというのは、まさに積極的なアート活動だし、支援があってこそ成り立つという一つのモデルになったらいいなと思っています。やりたいこと、残したいこと、大切にしたいものをまずは掲げてアクションを起こす。そうやって、「責任を持ってやります！」という人たちが増えていくと、それに触発された人たちも増えていく。そうやって世界が作られていったら素敵だなあという感じで、チュプキでは活用させていただきます。

カフェの活用

参加者 c：大変夢のあるお話です。大宮駅周辺に映画館がゼロということからも、とても大切な計画だと思いました。隣の駅のシネコンと棲み分けができればいいですね。たくさん集客がある大きな映画館に対して、コアなラインナップの映画を上映する映画館。それでいて気楽に通えるような。保育園の子どもを対象にした映画会のアイデアも素晴らしいと思いました。子どもの頃に映画館に行けば、大人になったときにも映画を観る習慣ができる。わたしも母親が映画やお芝居が好きな人だったので、よく連れて行ってきて、それで自分も好きになったと思います。アイデアとして、たとえば映画上映の後にカフェに移動し

て、お茶を飲みながら監督とお話を深めるとか、コーヒー1杯の料金の1時間ぐらいの交流の場が持てる、などはどうでしょうか。映画好きな人はもちろん、そこまで映画好きでない人でも、その場をきっかけに映画のいろんなことを知るにつながります。定期的で開催して、特に若い人に参加してもらって、映画を観る人をもっと増やしたいですね。



アイデアを話す参加者

今井：ありがとうございます。保育園の方が言ってたんですが、子どもたちを連れて行ける場所があまりないと。プログラムが合わない、遠い、お金がかかる、平日限定など制約があって難しいそうで。上映会はぜひ実現させたいです。あと、ちょっと補足すると、予定地の周辺に専門学校がいくつかあるんです。20代の子たちがコンビニでパンを買って、近くの公園のベンチで食べたりして。その子たちがこのカフェにちょっと立ち寄るとか、公園で遊んでいる子どもたちがついでに買い食いができるような、入りやすい場所になればいいと思います。カフェもやったことがないので無知なんですけど、映画館のコンセプションは値段が高くてあまり魅力的なものがないから、安くても美味しいものが出せればとも思っています。

ろう者がアクセスしやすい映画館

参加者 c：ろう者にとっては、映画に字幕がないのが大きな問題です。チュプキはすべての映画に字幕がついているので安心して来ることができます。字幕がついているかどうかを調べなくてもいいので。わざわざ横浜や千葉から来ている人もいますね。あとは、舞台

挨拶のときにUDトーク（字幕表示）の対応をしてもらうとか、ろう者がたくさん来ると予想される場合には手話通訳を依頼するとか、安心して参加できるような環境設定をしていただければいいと思います。

アイデアをまた思いつきました。「手話ハウス」という主にろうの方向けのシェアハウスが世田谷にあります。ろうの方がアパートの部屋を借りにくいという実情があって、実際にわたしも断られたことがあります。大家さんが何かトラブルを起こすのではという理由なんですけど……。このようなシェアハウスもいいのではないかと思います。他にも部屋を借りにくい方、たとえば障害のある若い方で、映画館のアルバイトもできるとか。もう一つはカフェに「手話カフェ」という日を設ける。スターバックスの国立駅前に手話が公用語の店舗があります。手話ができる人がスタッフになれる、いろんな方が訪れる、大変人気がある場所と聞いています。そういうコミュニティカフェのような考え方もどうでしょうか。

今井：素晴らしいですね！ リソースに限りはありますが、できるだけ可能性を考えてみたいです。最近いろんなことに特化したシェアハウスがありますよね。シングルマザー専用とか。これから必要になる高齢者のシェアハウス。映画に触れながら、人々が助け合いながら暮らせる場所になったら、本当に幸せですね。

さらに次の世代へ向けて

参加者 d：今井さんのお話がとても面白かったし、感動しました。次の世代にとって役に立つものになりたいという義理のお父様がまず素晴らしいし、それをひとつひとつ考えたり調べたりしながら映画館に行き着いたという今井さんも素晴らしい。実際にできあがるのが楽しみです、こういう映画館のあり方もあるよと広く知らせたいです。

参加者 e：今井さんのお話にすごくヒントがありました。今わたしが住んでいるところの近くに視覚障害者の方のグループホームがあって、「わたしがここに住んでいるからにはそこで上映会をしたいぞ（笑）！」と思って、いろいろ考えているところでした。

杉本：今、地方に面白い映画館ができてのを見て、第三の映画スペースみたいなものをゼロベースで考えると、映画の上映をしたい人がゆるく始められたらいいなと思っています。国や地方の制度を使ってできることもあるので、みんなが真似しやすいようなモデルケースを作りつつ、幅広く議論できたらと思っています。

今井：杉本さんとはいろんな話をしていますが、彼の熱さが大きな力になっていて、ありがたいです。あと、僕はこの建物はシェアハウスや映画館がゴールではなく、将来的にはもっと別の使い方をしていくこともあるだろうとも思っています。僕が生きている間にも変化してって、次の世代にまたどうなっていくかなという方に興味があります。

参加者 f●：配信が一般的になってきて、映画を観るという行為自体はかつてに比べたら爆発的に増えたと思います。映画館に行って観る人も、今はシネコンがデフォルトになっているから、「新しい映画館の体験」をこれから作っていかなくちゃいけないのかなと、みなさんの話を聞いていて思いました。

今井：映画を作っている人たちは、映画館で観てもらうことを目標にして作っているはずなんですよ。配信事業の会社が映画館を持ちたがっているという話も聞きます。人間は体がある以上、肉体の持つ経験はパソコンの画面では得られないので、映画館はまったく別のものとしてずっと続いていくと思います。そういう意味でも、映画館に触れる機会をいかに簡単に、いかに多く持てるかが大事だと思います。

杉本：メンバーと話していて最近出た結論が、「映画を観る動機は不純でいい」ということ。デートとか、美味しいご飯があるとか、暇だからとかで全然いい。映画の原点に戻れるようなことをしていけたらと思います。

参加者 g：個人的に、東京都内でもジェントリフィケーション*が起きている事態を目の当たりにして、経済原理に任せているとそうなるんだと思っていたところだったので、今井さんのプロジェクトは素晴らしいと思いました。地域をよくしたいと思っている人はいっぱいいる。その気持ちをつないで、仕組みを作って、各地でいろんなことが起きていくといいなと思いました。（*再開発等に伴い、都市部の低所得者層の居住地域

が富裕化する現象。家賃高騰、立ち退き、文化的多様性の喪失などの問題も起きている）

今井：まちづくりの話もまたいろいろありますが…、そういう意識を共有できるのも文化芸術の役割の一つじゃないかと思います。こういう機会を作ってくださって、ありがとうございました。

石井：じっくりお話を聞いてみたら、今井さんが本当にいろんな経験をされていることがわかりました。進捗もぜひ聞いていきたいですね。ご参加くださったみなさん、ありがとうございました！

(終)

(構成・文：舟之川聖子)

